

<http://ameblo.jp/shisyun/entry-10739461920.html>

2010-12-19 06:27:43

オランダのアート&デザイン新・言語

テーマ:美術

いやあ、久しぶりに、まさに「メチャ肌にピッタリ」の芸術を味わいました。たまたま、タイトルどおり「オランダのアート&デザイン新・言語」であり、そのキーとなるのは「新・言語」だと思います。英文では「Catalysis for Life New Language of Dutch Art & Design」とありますが、その中の「Catalysis for Life」がキーでもありますね。

ちょっと展覧会の概要をそのまま引用させていただきますね。

1990年代から、その前衛的なアプローチにより注目を集めたオランダ・デザインは、大量消費社会に多くの人々が違和感を覚え始めた時代の変化を背景に存在感を高め、いまや世界のデザインにおけるトレンド・リーダーの役割を担っています。彼らはそれまでの快適さや機能性を追求する20世紀デザインとは対極にある、まったく新しい価値観を提示しました。

コンセプチュアルと言われるその作品は、人の存在を肯定・尊重しながらも、「環境と消費」、「都市と社会システム」、「歴史と文化の継承」など、今日的な問題意識を下敷きにして、私たちに未来の選択を問いかけます。本展では特に人とモノとの関係、そして人と人とのコミュニケーションを問いかける代表的なアーティスト/デザイナーである、テッド・ノートン(コンテンポラリー・ジュエリー)、マーティン・バース(プロダクト・デザイン)、そしてアート分野からマルティン・エンゲルブレクト、タケトモコが参加します。彼らの作品は作品との接触によって、私たちの生活感覚にダイナミックな化学変化をもたらすような触媒作用を果たしています。驚きとユーモアのなかにイマジネーションが自然と拡大される、最新のオランダ・アート&デザインのエッセンスをお楽しみください。

以上の能書きよりも、とにかく、この展覧会、味えば、能書きの押し付けではなく、コンセプチュアルと言われるその作品は、人の存在を肯定・尊重しながらも、「環境と消費」、「都市と社会システム」、「歴史と文化の継承」など、今日的な問題意識を下敷きにして、私たちに未来の選択をどう問いかけているか、肌で実感できます。人の存在の肯定と尊重とは、はたして、どういうことでしょうか。

20世紀の絵画やデザインとは全く異なるアプローチであるのではないか。それは、予感として、「環境と消費」、「都市と社会システム」、「歴史と文化の継承」という中で、人間が中心として生きてきた社会のはずなのに一番地球から疎外を受けているのも人間である、それを20世紀は、アンチテーゼという形やら超現実的な訴求の中、単にアヴァンギャルドな側面で見せてきてただけなのに、この展覧会では、いかに能動的に社会に対して参加(アンガージュ)しながら、20世紀芸術では疑問視でしかなかったことを、プラグマティズムな活動として疎外の構図をユーモアとインタラクティブな感覚で鑑賞者を引き入れる魅力がある、のですね。

それが明らかなのは、ここでの4人の作家が自己主張で自らのアートをすべて完結させるのではなく、鑑賞者は時に参加者や賛同者となり、作家が意図するコンセプトの理解者と共に同じ行動を促す、そんな作品群であることは間違いありません。

ある意味、その表れが、今回の作品展が写真撮影OKなのではないでしょうか。たまたま、会場へ入場する際に、「これって、撮影、OKなんですよ」と尋ねたら

「ええ。ただ、あそこの吹き抜けに見える作品は、別の企画展、トランスフォーメーションですが、あれは撮影しないでください」と館内嬢に言われました。

ああ、そうなんだ。もひとつ別の企画展、中沢新一と長谷川祐子との共同企画による「トランスフォーメーション」。1980年代から現在にわたり15カ国21組のアーティストたちによってつくられた作品群。でも、これはパスしました。中

沢新一という名前が効いてきてはおりましたが、別料金だし(お得な今回目的の企画展とのセット料金もあるけれど)、満腹なのに、こいつは別腹というわけには行かぬのです。

それに、たまたま吹き抜けて見られた作品、別に写真に収めたいと思わなかったし。企画展としては、値段も含め、「トランスフォーメーション」が売りなのかも知れないのですが、私みたいな人間は、中沢新一の名だけで彼が作品を作っているわけじゃなし高い鑑賞料金はごめんあそばせ。アトリウムでのチラッと見た作品も、「オランダのアート&デザイン 新・言語」以上の感銘はなさそう、でしたし。

とは言え、MOTコレクションは観ましたよ。企画展のチケットでスルーだし(現金な奴)ね。それに「クロニクル 1947-1963 | アンデパンダンの時代」も「特集展示 | ピロロティ・リスト」も良かったですよ。ついでに特別展示なる森万里子さん(バレーボール選手でなく、森ビル創業者のお孫さんの方)の映像作品もよかったですよ。ヘッドフォンから流れる「コトバトケテ」の音楽は映像をよりそそらせてくれましたね。

で、先にも述べたとおり、本展覧会の作品は、一定の基準を守れば撮影とともにネット掲載もOKということなので、その基準を遵守しながら、以下、写真を掲載させていただきたいと思います。

作品の展示順とは異なり、作家のアルファベット順で掲載します。

Maarten Baas



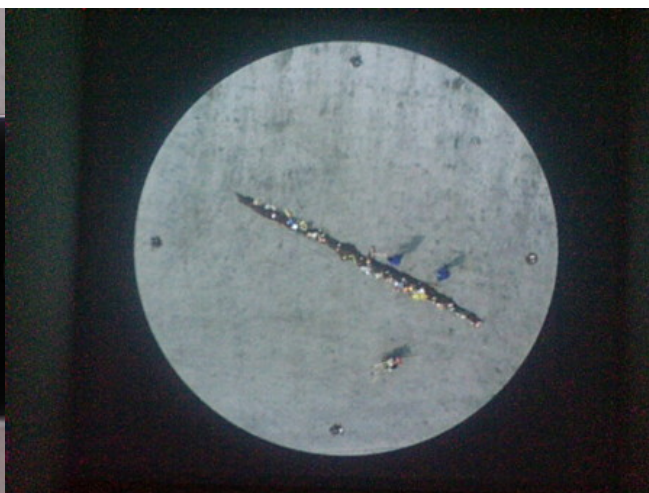
作家: マーティン・バース CC / BY-NC-ND



作家: マーティン・バース CC / BY-NC-ND



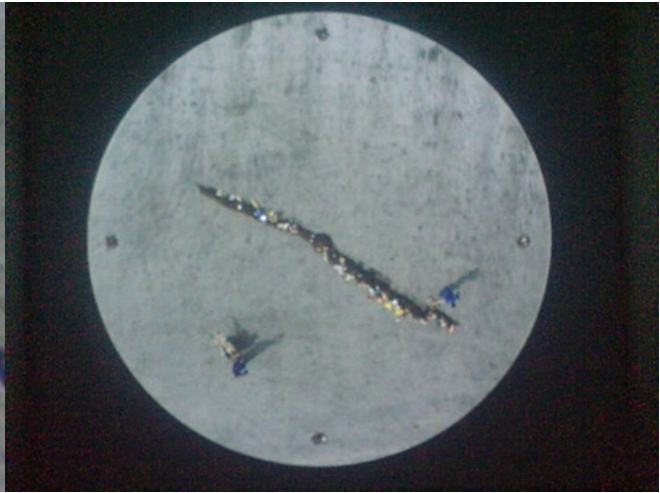
作家: マーティン・バース CC / BY-NC-ND



作家: マーティン・バース CC / BY-NC-ND



作家:マーティン・バース CC / BY-NC-ND



作家:マーティン・バース CC / BY-NC-ND

Martijn Engelbregt



作家:マルティン・エンゲルブレクト CC / BY-NC-ND

作家:マルティン・エンゲルブレクト CC / BY-NC-ND



作家:マルティン・エンゲルブレクト CC / BY-NC-ND



作家:マルティン・エンゲルブレクト CC / BY-NC-ND

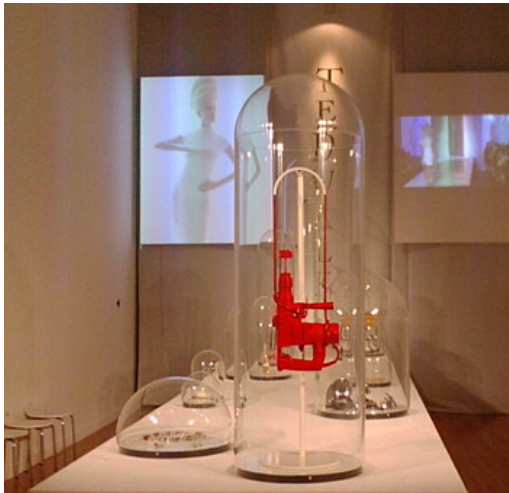


作家:マルティン・エンゲルブレク CC / BY-NC-ND



作家:マルティン・エンゲルブレク CC / BY-NC-ND

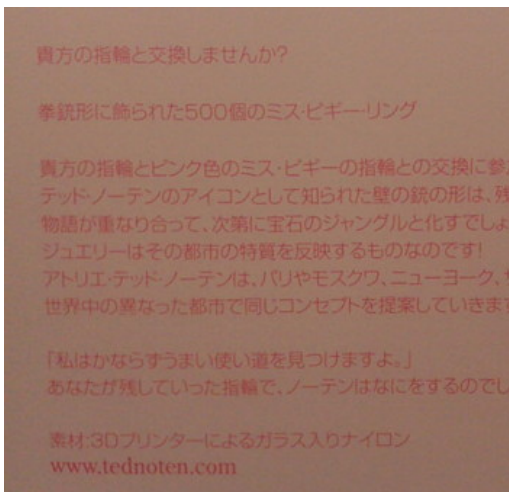
Ted Noten



作家:テッド・ノートン CC / BY-NC-ND



作家:テッド・ノートン CC / BY-NC-ND



作家:テッド・ノートン CC / BY-NC-ND



作家:テッド・ノートン CC / BY-NC-ND

Tomoko Take



作家: タケ・トモコ CC / BY-NC-ND



作家: タケ・トモコ CC / BY-NC-ND



作家: タケ・トモコ CC / BY-NC-ND



作家: タケ・トモコ CC / BY-NC-ND

ここには写真、掲載しませんでした、マルティン・エンゲルブレクトの作品で、芽が出かけたジャガイモ(制作当初は出ていなかったかも)を売る自動販売機がありました。100円と書いてあるし、自販機内の小窓の中には、ジャガイモがないものもありました。ひょっとかしてもしかして、本当に……。で、つつい館内の案内嬢さんに尋ねてしまいました。

「あれ、本当に買えるんですか」

「あ、実は展示当初は実際に買えたんですね。で、買ってかれた方もいらっしゃいましたが、途中から壊れてしまって100円入れても戻ってきちゃうんですよ。申し訳ありません」

いやいや、申し訳なくはないけど、買った人いたんだ。

「いや、どうりで、ジャガイモが入っていないところもあったものだから、ひょっとしてと思って」

ということで買う気があったわけではありません。しかし、途中で不測の事態で壊れてしまったのは、おそらくジャガイモの生長する気には負けたのではないのでしょうか。私たちは、ここで育ち続けるのだ、そんな人間に対するジャガイモの主張が感じられました。



オランダのアート&デザイン新・言語 by (C)shisyun

MUSEUM OF CONTEMPORARY ART TOKYO



MUSEUM OF CONTEMPORARY ART TOKYO by (C)shisyun